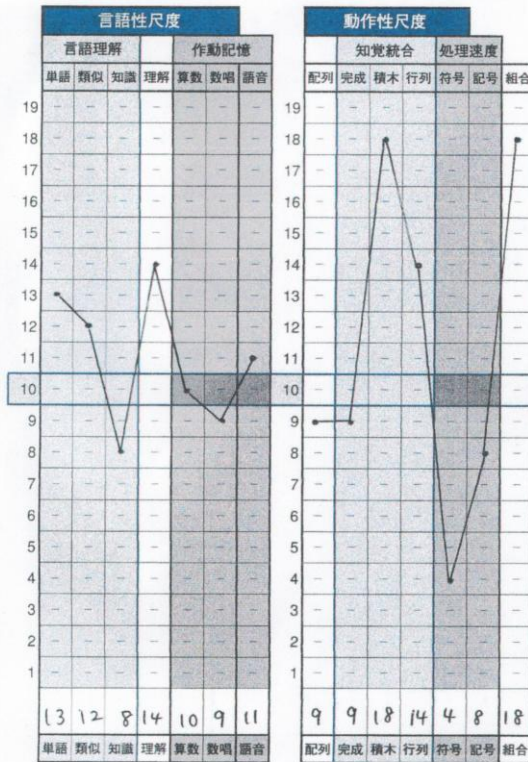


② WAIS-III プロフィール

2017.8.7 施行

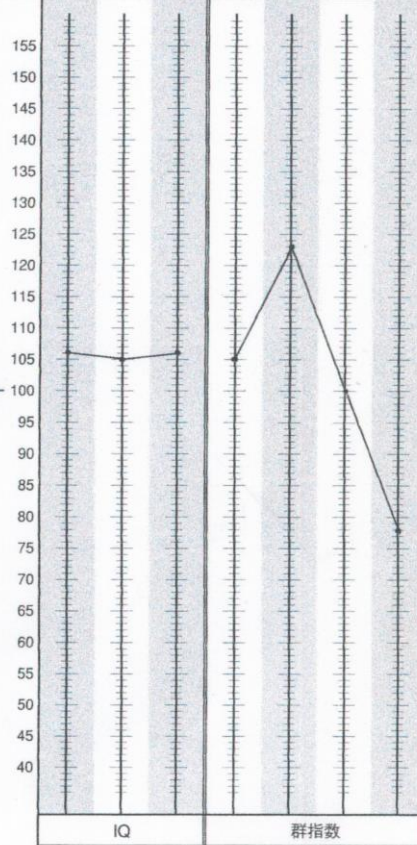
(33歳時)

	言語性	動作性	全検査	言語理解	知覚統合	作動記憶	処理速度
	VIQ	PIQ	FIQ	VC	PO	WM	PS
評価点合計	66	54	120	33	41	30	12
IQ/群指数	106	105	106	105	123	100	78
パーセンタイル	66	63	66	63	94	50	7
信頼区間	101 110	99 111	102 110	99 110	114 128	94 106	73 86
	90 %						



W

S S W W S



WAIS-III 検査結果

受検者：長岐 潤様
検査実施日：2017.8.7
検査時年齢：33 歳
報告書作成日：2017.8.27

検査時の様子

被検者は、20 分前に来院した。被検者は、「2,3 年前」に他院（高月病院）にて WAIS 歴があるとのことだが、その結果についての詳細は不明であるが、2 年以上前の受検歴であることから、今回の検査結果に大きな影響はないと思われた。しかし、被検者は、検査の前日に「緊張してあまり眠れなかった」と話していたことから、検査日の被検者の体調は万全ではなく、検査結果は被検者の集中力を欠いた状態を反映しているかもしれない。検査中、被検者は、礼儀正しく謙虚な受検態度であり、検査者と積極的にコミュニケーションをとろうとはしなかったものの、検査者から尋ねられたことに対しては丁寧に答え、時々嬉しそうな様子も見せた。更に、被検者は、疑問を抱いた際に「類似」の最初の問題（みかんとバナナの共通点）で、「果物」と回答後に「この質問の場合、暖色などもありますが、どれを答えたらよいですか？」と質問することができていた。しかしながら、被検者には、大雑把にはとらえずに、細部にこだわる傾向があると思われ、上記の質問だけではなく、「算数」でも、石けんの単位を「6 はこと言った後に 6 ばこ？」と言い直したり、「行列推理」の最後の問題で 5 分ほど考えた後、「数えたりしているのですが、わかりません」と回答するといった様子が確認された。また、被検者とのやり取りの中で、被検者の自身の自信のなさが見える発言が多々見られ（例：回答の前に「わからないんですが…」「自信がないのですが…」と前置きして話し始める）、検査後の感想では、苦手だったものは「暗記と算数」と話し、得意なものは「ない。他人と比べて何をやっても劣っている感じ」と話しており、被検者の自尊心の低さが見えた。

結果の解釈

FIQ(全検査 IQ):106 VIQ(言語性 IQ):106 PIQ(動作性 IQ):105

VC(言語理解) :105
PO(知覚統合) :123
WM(作動記憶):100
PS(処理速度) :78

得意なところ

「積木(18)」手先を用いて、見本の形を見て、見木と同じ形の積木を組み合わせること
「組合せ(18)」部品から全体像を想像し、組み合わせる
「行列推理(14)」図の法則性を読み取り、推理すること
「理解(14)」社会で学ぶような社会常識の理解や、社会ルールの理解

苦手なところ

「符号(4)」見本の記号を見て素早く書き写すこと
「記号探し(8)」記号を素早く、正確に見分け、○をつけること
「知識(8)」学校で学ぶような一般的な知識量

被検者の全検査 IQ は 106 であり、「平均」の範囲に位置していた。言語性 IQ(106)と動作性 IQ(105)の間に有意差は見られなかったものの、特に動作性尺度の下位検査間のバラツキが非常に大きく、被検者の能力には偏りがあると思われた。

被検者は、言葉を用いて説明したり理解することについては、言語理解(VC=105)と年齢平均と同等であり、大きな問題はないだろう。被検者は、単語の意味を簡潔に説明することができており(単語:13)、抽象的な概念も十分に理解していると思われた(類似:12)。また、社会で学ぶような常識やルールについても十分な理解があり、被検者にとって得意であろう(理解:14)。しかし、学校で学ぶような知識がと他の言語性の能力と比べてやや低いために「知識:8」、被検者の語彙が豊富であるにもかかわらず、知識が足りないところがあり、他者と話す際に、前提知識がずれてしまい、会話がかみ合わないことがあるのかもしれない。また、「単語:13」において、詳細を尋ねる query をすると最初の回答の言い直しになっていたり、「どちらかというとい」と「マイナスイメージ」と回答をしていたことから、被検者の想定していないことを聞かれたり、求められたことに対して詳細な説明をすることは苦手である可能性がある。

また、被検者の聴覚的な情報を把握し、頭の中で処理する作動記憶(WM=100)についても、年齢平均と同等であり、大きな問題はないだろう。被検者の作動記憶容量は、順唱 6 桁、逆唱 5 桁と年齢平均とほぼ同等であった(数唱:9)。「算数:10」も年齢平均とほぼ同等であり、大きな問題はないと思われたものの、「18 万円持っている人が 7 万 5 千円使ってしまった」時の残金を尋ねる問題で、1 秒で「1 万 5 千円」と答えており、やや衝動的に反応してしまう時があるのかもしれない。

動作性尺度については、被検者の中では、視覚情報をまとめる知覚統合(PO=123)の能力が非常に高いものの、その中でも、得意な能力(積木:18)と苦手な能力(絵画完成:9)の間に大きな差(=9)が見られたため、慎重に解釈する必要があるだろう。被検者は、「積木:18」、「組合せ:18」と、被検者の中で試行錯誤して正解を見つけ出すことが非常に得意であると思われた。一方で、「絵画完成:9」、「絵画配列:9」であり、被検者は、有意味情報の処理が苦手であり、特に有意味な視覚情報から必要な情報を見つけ出すこと、一場面から結果を予測することが、知覚統合の能力が高い被検者の中では苦手と感じやすいだろう。しかしながら、被検者は、「完成:9」、「配列:9」が年齢平均と同等であり、周囲の人とのずれに気づくことができると思われるが、幾何学図形の処理(積木:18、行列推理:14)や、被検者自身の中で正解を想像することができる能力(組合せ:18)が高すぎるために、周囲の人とのずれに気づいた時に、どう対応して良いのかわからないなど、被検者の知覚統合の能力の高さを生かせないことにより、余計に自信をなくしやすい可能性がある。

更に、処理速度(PS=78)と、知覚統合と比べて非常に大きな差があることから(差=45、標準化サンプルにおける差の頻度 0.7%)、被検者は、年齢平均と比べて、手と目を協応させて運動することが非常に苦手で、時間がかかってしまうだろう。これは、被検者の不安の強さが反映されていると思われ、「記号探し:8」では、最初の方でミスが一箇所見られたことから、被検者は、課題に慣れるまでに、ミスをしやすい可能性があるのかもしれない。また、パーツや積木を手で動かしながら組み合わせていく必要のある「組合せ:18」「積木:18」と、鉛筆を持って紙に書いていく「符号:4」、「記号探し:8」の成績が、あまりにもかけ離れており、被検者は、視覚情報を一時的に覚えることが苦手である可能性や、不安が高く、間違えないようにと、確認を慎重に行っていた可能性、協調運動が苦手である可能性など、様々な要因があると思われた。

以上のことから、被検者の知能は平均の範囲に位置していた。被検者の言語を用いて、説明したり理解する能力、聴覚情報を一時的に覚え、頭の中で処理する能力は、年齢平均とほぼ同等であり、大きな問題はないと思われた。被検者は、視覚情報を処理する能力が得意であると思われたが、その中でも、幾何学図形の処理や、被検者自身の中で想像するものについては、非常に得意である一方で、有意味な視覚情報から必要なものを探したり、状況から結果を想像することが被検者にとっては苦手であり、視覚情報処理の能力には偏りがあると思われた。この能力の差の大きさが、被検者の検査態度で、いろいろな可能性を被検者の中で考えてしまい、細部が気になる様子や、適切なものがわからずに困惑していた様子につながるのかもしれない。また、他の能力と比べて、処理速度の能力が低いことから、被検者の不安が非常に高く、間違えてはいけないと過剰に注意を払っているために時間をかけている可能性や、気をつけていてもミスをしてしまった際に、必要以上に落ち込んでしまい、自尊心の低下に繋がっている可能性が考えられた。